

情報の資本主義と形而上学

ソル・ユーリツク

(聞き手) 粉川哲夫

マルクスと情報論

——一九八三年でしたか、ニューヨーク・マルキスト・スクールでマルクス生誕一〇〇年にちなんだ集まりがあつたとき、あなたはマルクスを情報論としてとらえなおすことを提起されましたね。あれは、わたくしには大変刺激的なお話をしたが、会場の一般的な反応はかなりとまどっているという印象を受けました。みな初めびっくりしてシーンとなり、それからいっせいに笑いだすという風でしたね。正統派マルクス主義の集まりではなかつたはずなのに、どうしてあんな反応が出たのでしょうか?

ユーリツク 一般に、粗野な、あるいは雑なマルクス主義においては「物質世界」と呼ばれるものを強調する傾向があります。「物質世界」は、情報との関連でしか機能しないし、

論じることもできないということの認識が欠如しており、遅れているわけです。

マルクスを、特に彼の『資本論』や『要綱』のいくつかの章を情報論として読むことへのわたしの関心は、新しいメディア・システムつまりテレコミュニケーションやコンピュータの進歩によつて触発されたのでした。結局マルクスは、彼の考える「物質世界」が、彼の《語ったもの》と《語っているもの》との一対一対応関係であるということを説明しようとした。初めそれは、外延的な関係のようにみえましたが、その関係を追求するなかで、彼自身がいわば彼の過去の言語の囚人であることがわかつてきました。ですから、彼の初期の言説のなかには象徴的・連合的な自然という発想が入り込んでいますが、これも、言語と物質世界とが絶対的な一対一対応関係を作ることはできないという問題とみなせるのです。

こうして彼は、全く新しいフレームワークの創設におもむきます。すなわち『抑圧された人々』と『体制を今までとは全く違ったものとして見る人々』という観点です。これは、まさに情報という観点です。具体的には、『資本論』の「分業と分業の発生」についての章のなかでマルクスは、分業が情報の交換に関して從来の社会関係を切斷してしまうことについて述べています。

資本主義初期の資本操作においては、製造し同時にその物を売る人とそれを買う人とのあいだにはフェイス・トゥー・フェイスの関係があつたことについて語っています。ここに全く新しいシステムが入り込んでいます。新しいシステムにおいて要求されるのは、労働者がたとえば流れ作業のなかで行なう労働は、製品全体とは無縁であり、瑣末な一つの仕事を繰り返し行なうことになり、労働者の知は、まるで彼らが低能でもあるかのように空にさせられてしまうということです。

このように、マルクスには情報とコミュニケーションの理論の根があるわけですが、さらに彼がとりわけ金融について語るとき、彼は情報をことを語っているのです。というのも、会計システムというものは、物質的な事業があるとえられた時点においてどのような状態にあるかを記号論的に語るところのものだからです。情報の侵入は、知覚の変化をもたらしますが、情報は、その語が示唆しているように、「内側を形而格式化する」あるいは「内側を再編する」からです。情報の侵入というこの新しい事態を理解することが非常に

重要なのは、過去においては、たとえば海産物の在庫目録を作る場合、個々の品目を書き出してリストを作り、品物を受取人に手渡しすればよかつたのに対し、これが貨幣に象徴されるような象徴交換にかわったからです。いまでは、市場中にまたがるセンサー装置による同時コミュニケーションが行われ、情報が全世界の金融操作を行おうとする中央コンピュータへ送られているわけですね。

——すでに大分以前からマルクスやマルクス主義の有効性は低落しているわけですが、それ以前の文脈でも、特にアメリカではあなたのよくなマルクス解釈はほとんど孤立していると思います。どのようにしてマルクスを情報論としてとらえなおすことにおもむいたのかをお聞かせください。

ユーリック こうした分析の一部を思い付いたのは六〇年代の文脈においてであり、自分流のマルクスの読解を通じてでした。問題は、マルクスが言つたことをまるで神のご神託か何かのよう受け取ることではないわけです。わたしは、マルクスを読む場合、二つの方向があると思います。一つは、分析の道具の側面です。それによってわれわれは、現実世界をながめ、マルクスの観点が繰り返されているのかどうかをたえずチェックすることができます。もう一つは、プロレタリアートの組織にとっての道具としての側面です。歴史を作る者としてのプロレタリアートというマルクスの予言的な観点は、わたしのなかで崩れ始めました。たしかに、商品生産のなかでプロレタリアートは、ある意味では歴史を作っています。しかし、彼らは究極的には歴史をコントロールで

きないです。大きな労働運動があつた時代には、いまよりはそうした側面に有効性がありました。しかし、その場合でも、「かたまりの人々つまりプロレタリアートに向けられたメッセージが、別の、プロレタリアートではない「かたまりの人々にも向けられるのです。事実、資本主義の理論家たちはマルクスから学び、勧告しました。そして、資本主義者の方が、修正し始めたのでした。

また、多くの労働者がオートメ化され、スピードアップされるようになつたという問題もあります。初期のオートメーションでは、生産と機械のペースがスピードアップされただけで、機械はただの機械だったのですが、いまではそれではありません。機織機械ですら情報機械になっています。オートメーションが増えるにつれて、生産はコンピュータによって数量的にコントロールされ、より少ない労働者しか必要でなくなりました。これは、現在日本でもアメリカでも起こっていることであり、言い換れば、プロレタリアートが削減されているということです。これまで労働者を組織してきたとみなされている組織、たとえば組合は、愚かにもこうしたプロセスのなかで何が起つてあるのか、そして／あるいはそのなかに何が含蓄されているのかを知らないのです。

アメリカで、さまざまな産業が衰え、膨大な職が失われ、失業率が増加することは必然的なことです。おそらく、労働者を組織している組合や左翼グループのリーダーたちは、彼らに何が起つているのか、それと闘うにはどうしたらよいのかということを告げる情報提供をすべきだったのでしょうか。

労働運動に関しては、改革路線で話をするしかありません。それに、これは忘れてはならないことです。組合とその「勝利」は、決して革命のためではなく、より高い賃金のためのものだったという事実です。そこでは、眞の社会変革は欲されてはいなかつたのです。

——わたくしがあなたのマルクス解釈の形成過程に関心をいだくのは、ひとつには、情報テクノロジーの過剰な浸透が一方にあり、他方でマルクスへの非常に素朴な理解がはびこつているアメリカという文脈のなかで、どうしてあなたのようないい思考が形成されたのかに興味をおぼえるからです。誰かの思想から触発されたというようなことはあつたのですか？

ユーリック 自分の影響を受けたのです(笑)。ご承知のように六〇年代には社会は大きく揺れ動きました。しかし、なぜそこでマルクス主義が、最も柔軟なタイプのものですラインパクトを生みださなかつたのかということです。マルクスの文献を再読すればわかるように、ある面で、マルクスには予測することができなかつた事態があります。また、これまではほとんど神祕的な力をもつてきた「進歩の必然性」というものが、もはや神祕的な力ではなく、社会的にしばしば上から加工されるものとなりました。しかしながら、一九六七年という時点では、わたしの知っているマルクス主義者たちは誰一人としてこの問題に関心を示しませんでした。

ちょうどそのころ、コンピュータ関係の人々と知り合いになつたことは幸運でした。飛躍と新しいつながりを求める小

説家としての直感がこうした関係に導いたのでしょうか。世界の総体は、ある意味で、そのなかのすべての発展を一つ一つ考慮に入れなければならないのですから、『資本論』の「分業」論に関してわたしは誰もやらない解釈をしたのは、わたしがわたし自身に影響を与えたからだと言つても、自慢をしたことにはならないわけです。

頭脳としての情報局

——わたくしの考えでは、マルクスは「資本」をヘーゲルの「精神」との関連で考えていましたと思うのですが、あなたが「インフォメーション」と区別してしばしば用いる「インテリジェンス」(情報／知性)という概念は、いわば両者の中間にあり、両者の関係を媒介しているように思えます。

ユーリツク マルクスは、資本に関して彼自身の解釈と資本主義者の解釈とを同時に与えています。ですから、われわれは二重に考える必要があります。一つは、シンボルを扱う問題、資本の記号論的諸操作——あらゆる種類の金融装置——金、預金の支払証明、信用状などの問題です。もう一つは、資本が機械や労働者との関係において示す現実的、具体的な現象です。

要するに、両刃を見なければならないのです。一方の刃は「物質的」で、他方の刃は「精神的」であると言つてもよいかもしれません。後者は、少なくとも「精神の表現」であるとは言えるでしょう。ただし、その場合、「精神」というのは、特定の記号論的装置を操作している一群の人々の「精神」

であるということを強調しなければなりません。
すでにわれわれは、知的能力を言い表わす用語として、「知識」^(ナリティ)、「認識」^(ノウジン)、「情報」^(インフォメーション)をもっており、それらの定義をしようとなれば何世紀もかかるでしょうが、いまや存在を一群のデジタル信号としてとらえる「記号学的」な記号^(マニピュレーティブ)という第四の用語があるわけです。実際に、一般的の傾向は、チャールズ・サンダース・パースが「宇宙は信号から構成されている」と言つて以来、反唯物論的になっています。それでも、宇宙は信号以上のものから構成されています。それに、記号学という観念そのものは観念的であるだけでなく、ほとんど神秘的です。

わたしが「情報」という言葉を使うとき、それは一群の信号を意味してもいますが、むしろ《資本化された知識》およびコンピュータとの関係における知識を特に指そうとしています。「インテリジェンス」は、究極的に、情報が一緒になり、機能する仕方です。ですから、たとえば、経済状況を扱う場合には、とらえられている情報だけでなく、政治、文化、イデオロギーなどの多様なファクターを扱わなければならぬのです。つまりこれは、情報局^(インテリジェンス・エッジエンジニアリング)が様々な情報局^(インフォメーション)を操作するやり方ですね。彼らは、「生データ」と「インテリジェンス」とを区別しています。「生データ」は彼らの場合、世界中からくるわけですね。

情報局で行われていることは、ある意味で人工頭脳のおもしろいモデルでもあります、そこには地球のいたるところから電子メディアを通じて様々な情報や断片的な知識が集ま

るわけです。問題は、データの連結とその解釈です。情報局の機能はそこにあるわけですから。ここには、頭脳があらゆる種類の信号をプロセスするやり方と、組織——それは情報局のでも企業のでもよいのですが——がデータをプロセスし、評価するやり方とを少なくとも比較できることを示唆しています。

情報の形而上学

——ヘーゲルの「精神」のなかには、あなたの言われる「インテリージェンス」つまり《電子情報》が含蓄されていると考えることはできませんか？あなたも言われたように、電子的な世界とは《形而上学的な》世界です。とすれば、今日の世界はヘーゲル的な論理のなかで動いているとは言えませんか？

ユーリック それはちょっと抵抗がありますね。たしかに電子的な世界は「形而上学的」なのですが、拷問や死、輝く太陽のあるたとえば南米で、「世界は形而上学的だ」と言うことはできないでしょう。機械もまた精神の、「人間」の産物だということを忘れないことが重要だと思います。

たしかにヘーゲルは、人間を完全に越える弁証法的な運動を想定しました。しかし、そこで前提されているのは、一人のあるいは少数の人々のコントロールを越えた人間活動の「総体」という概念なんですね。そうした「総体」が前提されて初めて、「電子的な神経組織」とか「社会動物」といったものを問題にできるのです。これは、ある意味では、一個の独立した頭脳というよりも神経の結節をもつた原始動物に似

ています。

たぶんここには、一個の独立した知性へ向かう抑えがたい衝動があるのでしょう。それが実現されないがゆえに、「神」とか「精神」といった超越論的な「総体」が要請されるのでしょう。しかし、わたしは、人間の具体的な活動の先へ越えることはできないと思います。形而上学的にあるいは「精神的に」考察することはできますが、取り扱われているものは、人間活動であり、人間の頭脳が機能するやり方とアナログな機械なのです。情報的ないしは知識的な放射物の「総体」というものを概念的に構築することは可能でしょし、そういうやり方でものを見ることが可能ですが、個々の人間があり、身体が存在するということです。

——おっしゃる通りだと思います。しかし、わたくしが言いたかったのは、マルクスの批判や転倒にもかかわらずヘーゲル的論理が支配的になつているということです。實際にはびこっているのは疑似精神世界です。人工頭脳を求めるあくなき情熱はまさにヘーゲル的論理のなかで理解されると思うのですが。そして、それだからこそ、「インテリージェンス」とは区別された《身体》の問題が重要なになってくるのだと思うのです。

ユーリック そう、たしかにそうだと思います。ヘーゲル的な世界観では、精神や知性は人間活動の外側に位置するわけですが、わたしのネオ・マルクス主義的な——とあえて言う——立場からすると、精神は人間活動の内部に位置し、人間活動の産物です。おもしろいのは、ここには、そのいづれ

が正しいかということよりも、人間を超える道具を創造しようとするある進化のイデオロギーによって流布された興味深い欲求が見いだせることです。今日の人工知能もその一侧面です。

しかし、わたしが言いたいのは、個々の人間を構成している複雑さや頭脳と身体が機能する仕方は、複製可能ではないということです。それは、今後も同様でしょう。これは、重要な確認です。ヘーゲル的なシステムにおいては、人間がすべて死滅しても、精神は生き残ります。ネオ・マルクス主義の文脈では、すべての人類が死ねば、知性も精神も滅びます。これは重要な違いです。

資本主義的な金融には機械への依存とりわけコンピュータへの依存が高まり、金融機関の動きがスクリーンの上に図示されるようになるにつれて、金融操作に関係する人々のあいだにそうした図示化を避け、機械にまかせるよりもフェイス・トゥ・フェイスの関係を求める人々が現われます。つまり資本主義の側からも抵抗が生まれるということです。

——ハイデガーは、形而上学をテクノロジーとの関係でとらえなおすことによって、今日の技術化された世界を「形而上学的」な世界として見る方向を開きましたが、あなたが、今日の金融取引の一つの極限形態を「形而上学的」な世界としてとらえるとき、わたくしはハイデガーとのつながりを感じました。

ユーリック ハイデガーも言ったように、歴史上のいかなる時代をみても、すべての人が生産に直接結び付いているわ

けではありません。そのため、たとえば、何らかの形而上学的な行為のために食べるという人が出でます。形而上学とは、情報をある種の物質的な生き残りのために用いる現象を意味します。忘れてはならないのは、哲学者は、どんなに素朴な、あるいはどんなに洗練された者であれ、考るためにどのみち食べ物や家に依存するということです。金融業界の人々がさまざまなセンサー装置を通じて観察を行なう会計のシステム、観察のシステム、またそうした能力といふものは、巨額の金がたとえばアメリカ合衆国から日本に流れれば、現実の、物質的な反響が起きることは言うまでもありません。こうした反響は、物理的な効果をもつた一群の信号ですが、この信号 자체は形而上学的なのです。しかしながら、別の見方もできます。コンピュータが文字通り工場を走らせているところでは、そのソフトを成すコンピュータ情報は形而上学的であるということができるのですが、そこには同時に工場という身体との直接関係も存在するのです。ですから、またしても、世界を全体としてとらえようとする「形而上学」という概念は、世界の一部でしかないわけです。

資本主義の終末

——一つ確認をしたいのですが、あなたは「資本主義」という概念に関しても独特の解釈をされていますね。たとえばエマニュエル・ウォラースティンは、「資本主義は終わる」と言っていますが、あなたはローマ帝国を「資本主義」として

論じられることもありますね。そうすると、資本主義の現段階はどうなるのか……。「資本主義」は歴史概念なのか……。この辺のことを少し整理していただけませんか？

ユーリック わたしがやってきたことは、「資本」や「資本主義」という概念を、組織の様式が本質的に情報や機械のコントロールに依存している極めて原始的な時代にまで引き戻すことです。テコや原始的なノミも機械の一種ですが、どんなに原始的な社会にも人間の『補綴的』^{プロテクティブ}な拡張が見出せます。情報のコントロールは、僧侶やシャーマンが、たとえば薬草の効能についての知を用いることのなかにも存在します。

極めて「未開の」時代にも恣意的に価値(価格)を割り当てることのできる交換トーケンがありました。いわゆる「洞窟時代」にも、石がノミで削られ、記念物になり、遠くに運ばれていくことがありました。それは貨幣ではなく、シンボル

だとしても、そこには明らかに、信用状のようなものがあつたわけです。バビロニア、古代のエジプト、ギリシア、ローマには、ある種の信用状がありました。それは、抽象的な様式の資本であり、実際に価格を割り当てる記載がなされ、一定の金額がそれに沿って移動され、交易が行われたのです。中世とりわけ一二世紀になると、トランサンショナルな活動を行なう国際的な銀行システムがありました。

今日の資本は、もとと精緻な形態に達しているわけです。シティー・バンクの頭取だったウォルター・リストンは、「電子の金」ないしは「電子貨幣」という概念を提出しました。

——「情報本位制」ということを言ったのも、ウォルターユーリックでしたね？

ユーリック その通りです。わたしの考えでは、資本主義は人類の登場とともに現われたということです。言い換えれば、わたしは、「原始的社會主義」というものを信じません。そんなものは、一度も存在したことはないと思うのです。もし、わたしの考えが正しいとするならば、おそらくは一九世纪に始まると考えられるいわゆる「資本主義」の支配システムを、それ自体としてはある側面を選び、他の側面を排除する支配システムがある異なった内容をもつたものとして、つまりその新しい特種形式として考察することができるわけです。

言い換えるれば、支配システムを狭義の「政治・経済」システムとしてではなくて、広義の文化として考察できるということです。「資本主義」とはひとつの文化です。しかし、それが自体は、支配の文化であり、だからこそ、資本主義に対する闘争は、一八世紀に始まる一つの発展に対してもではなく、歴史全体にまで拡がっているわけです。歴史の誕生とともに資本主義があり、そしてそのあらゆる支配システムから人類を解放しようとする欲求があるのです。

ウォラースティンは、資本主義の終末を論じていますが、それが何に基づいているのかわたしにはよくわかりません。一九世紀に始まつた「資本主義」は終わるとしても……。金融システムの崩壊がふたたび起きるということも考えられますが、資本主義そのものが崩壊する徵候は、どこにも見出

せません。資本主義がいすれは崩壊するという発想は、一種の信念行為です。マルクスの世界分析のなかには、宗教的な信念行為の要素があります。彼の世界構図は、貧弱に理解され難い観念に基づいています。システムの崩壊に围绕して、

また進化概念に基いています。システムの崩壊に陥してしまったことは、むしろ資本主義システムが崩壊するまえに、地球の汚染のために人間が滅びてしまうことでしょう。わたしが恐るのは原子爆弾ではなくて、地球汚染です。地球の空気、水、川、海、土地はひどく汚染され、危険な状態にあります。生物の大量死の危険がせまっているのです。

——そしてそれは、社会の内部でも進んでいる……

あることに気づいていないことです。金のあるミドル・クラスの人々は金とたわむれることができるわけですが、自分たちが捕えられているシステムがどのようなものであるかを理解してはいけないのです。それを理解しはじめるためには、彼

らの側に知識が要求されます。しかし、いまわたしたちが話していることを誰もが知っているわけではありません。限られた人がコンピュータを使い、資本効率はますます速くなるにつれて、人口の大多数が無用のものになっていくのです。わたしの考えは悲観的ですが、わたしはだんだんこう考えるようになりました。

この点でもマルクスは、従来の物的生産のシステムとは違
う、今日支配的になつた金融システムについて語つてゐるに
もかかわらず、事態をリアルには認識してはいませんでした
そんなわけで、実際に、国際金融の世界ではさまざまな嘘

つまり形而上学がはびこるわけです。人間は、食べなければならないということを除くと、物質世界からますます遊離しつつあります。

希少性の問題

——いわば「希少性の生理」がなければ資本主義は成立しないわけですね。

理的にも、したがって精神的にも変化していないとわたしは
あえて言いたいのです。人間は、衝動を感じれば、自分の富
を、ときには極めて原始的な、野蛮なやりかたで誇示します。
人間は、過去にもつていていたすべての未開性をたずさえ、かつ
それをあとから獲得した人工物で禁じなければならぬのです。
そのため、金融のレベルにおいても、純粹に形而上学的
な情報の交換にだけにしか関わらない資本主義者というものが
は存在しないのです。ジャン・ポール・ゲティのように、金
儲けをするだけでなく、美術館を造りもするだろうし、美術
品を買ったり、豪華な家を建てさせたりもするわけです。

われわれが調べてみなければならぬのは、人間に蓄積と他人に対する誇示をさせ、すでにビルトインされているものを労働として展開させる衝動についてです。それは、部分的には生理的なレベルの衝動でしょう。この衝動によつて資本主義システムが存在し、資本主義者の反応のなかに見出されるものが存在するわけです。金はどこからもつてこなければならないわけだから、蓄積が進めば進むほど、希少性が生まれるわけで、資本主義者における表現の欲求は、こうした希少性への欲求にほかなりません。そのため、資本主義システムのなかには、資本主義者を明確にいるいは無意識に悩ませるシステムつまり『サディズムの全体システム』が作り上げられるのです。

——銀行のシステムを信仰のシステムと考える場合、そうした『世俗世界』とりわけ近代以降のそれにおいては、それ以前の宗教的なコミュニティとは違つて、「希少性」への信仰を各自がいわば自らの身体においてもつ必要がないわけですね。銀行システム自体がそのつどそうした「信仰」を付与してくれるからです。しかし、信仰的な生理は変わつていい……。

ユーリック アメリカでは六〇年代以降、急速な変化が起つりました。不幸の度合いが高まつたのだと思いますが、人々は次第に何らかの形式の宗教に向かつたのです。仏教徒になる者もありますし、アメリカ・インデイアンやブラジルの神秘主義的な宗教に帰依する者もいます。金銭の宗教は、緊張感と感情を与えないで、人々は、別のものに向かつたわけです。自分たちが直面した変化を分析してみるのではなく、

それを逃れたのです。ですから、これは破壊的な運動です。そして、これは、自分には「現実的」でも実際には形而上学的なもののへの欲望にほかなりません。またこれは、ある種の自己陶酔につながるものかもしれません。ドラッグによる本格的な陶酔ではないとしてもです。

誰もが、トップレベルの人々に至るまで、みな考えることが恐いのだと言えるかもしれません。これが高じると、かつてローマ時代に、もともとローマのものではないさまざまなお祭りがローマに集まつたのと似たようなことが起こります。人々は、強烈な中身のある生活だけを求め、さもなければジョギングをするというわけです。しかし、ジョギングは、運動としてだけでなく、自己陶酔として理解されなければなりません。ジョギングをしているとき脳の生理は、自分を陶酔状態に追い込んでいくときとある点で類似しています。

——電子テクノロジーが発展するにつれて、寡占化がますます進み、権力がますます少数者のもとに集中する傾向が強まるのですが、あなたの「電子封建制」という概念は、そうした状況を言い表したものですか？

ユーリック わたしが「電子封建制」という言葉をもち出したとき、わたしは、普遍的なシステムの出現とその崩壊のことを問題にしようとしたのです。ここには、ハイエラギー的なコミュニケーション・システムとしてのカソリック教会とコミュニケーションの世界規準の発展とのあいだで生ずることと似た問題があります。

われわれは、ある特別の時点、一つの中間点に達している

インド・アート

神話と象徴

H.ツインマー著 宮元啓一訳
俗世の幻影を脱し、解脱を求めるインド思想を神話・哲学・美術の渾然一体とした姿で捉え、華麗な文体で読み解く絶好のインド入門書。ツインマー待望の刊行

¥2800

神秘主義

ヨーロッパ精神の底流

川端香男里編若桑・志村他著
「口を閉ざして語らぬ」西洋神秘主義の諸相を四人の気鋭の研究家が縦横に論じる。ルネサンス、カバラ、アメリカの隠された秘教を読み解く快著。

¥2000

青い狐

ドゴンの宇宙哲学

グリオール他著 坂井信三訳
西アフリカ・ドゴン族の語る神秘的な生命の哲学。ドゥルーズ＝ガタリに多大な影響を与えた快著

¥6800

せりか書房

〒101
東京都千代田区猿楽町2-2-5
振替東京5-143601 興新ビル
TEL.03(291)4676

のだと思います。現時点では、この電子システムは完成してはいないので、ますます多くの人がこのシステムをさまざまに領域で稼働させるために必要とされています。というのも、そのプログラムがそれほど洗練されていないため、それがばらばらに稼働できるためです。しかし、いまは拡張の段階、人が必要な段階にあるとしても、たとえば金融操作が、究極的に、完全にコード化され、ますます人がいらなくなるという可能性が考えられます。

表面的には、通貨の交換業務は、非常に論理的なものだと考えられます。実際にそう考えることができる一連の動きがあるわけです。しかし、他方、それは、ある一定の交換に対してある人々がもつ感情と他の人々のもつ感情とは違います。そこでは何か別のことが起こっているわけで、業務全体は純粹に論理的であるわけではないのです。

こうした要素がプログラム化できるかどうかは、疑問です。

そのためには人間の心理そのものをプログラム化しなければ

ならないからです。もし心理をプログラム化しなければならないとしたら、それは、プログラム化の能力を完全に越えてしまうでしょう。現在ある最も洗練されたコンピュータでもまだ、人間に比べれば素朴であるということを忘れてはなりません。そのため、金融取引において、論理的な計算だけではなくて、神秘的な符合にもたよる人がいるわけです。ウォール・ストリートには魔術師を雇っている金融業者がいます。こうしたことがすべてこのシステムの一環であり、高度に近代化されたものの片側にプリミティヴな「正義」がつきまとっているのです。

一〇分間の革命

— わたくしには依然として「革命」という観念に執着をおぼえるのですが、あなたはかつて、「革命は一〇分である」と言われたことがあります。たしかに革命が一〇分以上続くと革命の制度化が始まります。今日、ますますマルクス主

義的な「革命」は非現実的なものとなっていますが、いま「革命」について論じるとしたら、それはどのような形において可能なのでしょうか？

ユーリック できればわたしも、革命は完全に世界を変革するものであり、望ましいものだという信念をもちたいものだと思います。わたしは、それを否定するわけではありませんし、そのような革命が起ころるべきだと考えます。しかし、革命は、何らかの現実のもとで、とりわけ二つのコンテキストのなかで見られるべきです。

一つは、六〇年代のさまざまな時点での労働者の部分的な参加のもとで起きた世界的な学生運動です。たとえばパリの五月革命ですね。もう一つ見逃してはならないのは、そうした運動に対して意識的に結集された破壊活動です。これは、フランスナショナルなシステムそのものの性格です。わたしは、たとえば日本とアメリカのように、その一部が時としてさまざまやりかたで争ったりもするシステムのことをしているのです。

この権力システムは、人々の生存を可能にする諸事物、とりわけ食糧の流通を非常に物質的なやり方で独占するのです。これは、歴史上の様々な帝国がやってきたことであり、別に新しいことではありませんが、帝国は、自分の資源で維持してきたものを次第に生産しなくなるものなのです。帝国は、資源を使いつぶし、資源を求めて遠くへ遠くへと進出していきます。ローマ帝国が自己資源で存立するのをやめたとき、麦をアフリカから、鉄をゲルマニアから輸入しなければなら

なくなりました。

大英帝国は、最終的に第一次世界大戦の終結によって終りを告げましたが、皮肉なのは、ロンドン市が、金融セクターとして世界で最もパワフルな勢力の一つになったことです。ここで出現した資本主義的な基本戦略は、すぐ手近にある資源を処理する代りに、遠くの資源を処理するということです。すなわち、これは、相互依存のシステムであり、もしこのシステムを支障なく維持するトスレバ、地域で生き残れる者は誰もいないといったシステムなのです。

こういうわけで、支配的な国家権力への反対と経済システムという二つの側面は、世界的な規模で相互に組み込みあっているのです。フランスナショナルなシステムは、地域レベルで敗北するにすぎません。ですから、造反しなければならないのは、これまでのよう単に地域的なシステムに対してもだけではなくて、世界システムに対してもです。しかし、現実にはすでに、もし一つの国でトラブルが起ると、他の国がその国を助けるということが起ります。今日、南アフリカで変革の動きがありますが、合衆国はそうした変革を推進することを拒否しています。

同じことは、すでにパリ・コミューンの直後に起こっています。一八七一年にパリでコミューンの蜂起があつたとき、ドイツ軍はコミューンの打倒に手を貸しました。以後、システムは、ますます国際的になり、たがいに結合しあつているのです。

過去においてもそうでしたが、今日ではますます強まっています。

いる傾向は、ラディカルな運動のほんのわずかの動きですらもが見破られてしまうということです。すでに一八四〇年代から革命にいたる革命までのロシアの状況がそうでした。運動は、次々に見破られ、直接粉砕されるか、あるいは冒険主義的な路線に導く挑発者によつて敗北させられました。

造反と世界システムとは相互に浸透しあつてゐるので、究極的には、指導者とは何の指導者であるかを正確に知ることができます。自分の指導者が諜報員かも知れないのです。間接的に操作されているということもあります。しかし、それ以上のことがあります。

たとえば、一九六〇年代以前には合衆国の学術世界にはマルクス主義者の大学教師はひとりもいませんでした。その後、マルクス主義者は取り込まれていきました。彼らはいま、物質世界を取り扱う代りに、「ディコンストラクション」だ、「構造主義」だ、「ポスト構造主義」だと、おそらく全世界で数千人にも満たない人々に向かってだけ語りかけています。ですから、いま合衆国の「革命運動」は、戦闘的だとしても、せいぜい百人たらずの人々によるセクトによつて担われているにすぎないのであります。さまざまの党派がありますが、その革

命の目指すところは崩壊であり、自然発生的な蜂起なのです。しかし、それをつぶす技術はますます近代化し、高度化しているのです。電子的な監視技術があるし、極めて洗練された挑発の技術もあります。たとえばCIAは、一九七〇年代にイタリアで起つた反乱（アウトノミア運動）をつぶす手助けをしました。

ですから必要なのは、人民の耳に近づき、彼らがいかなる世界に生きているか、彼らが、コミュニケーションを切り離された場にいるのだということを知らせることです。しかし、理解されなければならないのは、マルクスが階級理論について語る以前から、人々はみな階級とは何であるかを知つてゐたことです。彼らは、自分らが抑圧されていることを理解していました。この点で合衆国はおもしろい例だと思います。そこには、自分がトップに行けるという幻想が存在するからです。十分な物質的快適さと上昇の可能性があるところでは、「革命」は存在しないでしょう。合衆国で「革命」が起こることはおもいません。わたしが予見するのは、それ自身を破壊するシステムの出現です。といつても、それは、そのときわれわれはしたいことができるというわけではありませんが。

「対話をおえて」ソル・ユーリックは、一九七八年九月に来日し、東京と京都で講演を行ない、いくつかのインタヴューを残して帰国した。わずか十日間の滞在だったが、彼に接した人々にとって、その発言は意表を突くものが多く、刺激的であったにちがいない。

わたしは彼の思考スタイルにこの十数年間慣れ親しんできたが、彼の話にはいつも新鮮な驚きがある。とりわけ知の諸活動を諜報員や諜報機関の情報操作と対比させて考えるスタイルが、彼の話にはいつも新鮮な驚きがある。とりわけ知の諸活動

刺激的だ。

最近読んだ「オエディプレイ」という論文のなかで彼は、「近

代のコンテキストのなかでは、心理学的、医学的、社会学的、人類学的等々の社会研究はすべてスパイ活動の形式をおびる」と書いている。ユーリックによれば、一三世紀におけるカバラ学者と諜報機関との闘いは、近代科学から今日の「脳」対「人頭脳」の闘いにいたるまでもちこされている。このインタヴューのなかにも、「中央情報局」と「脳」とを対比させるくだりがあるが、この発想は実に多くのことを考えさせる。

すでにユーリックは、一九八二年に発表した小説『リチャード・A』(邦訳『狙われた聴者』)のなかで、カバラ学者の血を引く電話ハッカーのリチャード・AにCIAの諜報員キーツを対置し、キーバ危機のさなかの政治状況を両者の闘いとして描きなおした。この小説のなかでリチャードは、ソ連のスパイの疑いを受けてキーツたちに追及される。キーツは、リチャードを病院に監禁し、さまざまな電子装置を使つてリチャードの「無意識」を探索する。なるほど、諜報とは、精神分析のマクロ的な形式であり、意識の探求とは諜報のミクロな形式である。

今日の諜報活動が、文化人類学、社会学、言語学、精神分析学等、あらゆる人間諸科学を動員するのは、まさにその本性にかなつたことであり、むしろ諜報活動の方がそうした諸科学に先立つていていたのだ。とすれば、諜報、情報操作、スパイ活動の側から諸科学や思想史をとらえ返すことが可能なはずであり、そういうことが諸科学や思想史を有機的な形であらわにするためにはさわしいということになる。

こうした諜報論的思考の重要性の一つは、通常の科学史や思想史のなかで希薄になることの多い「階級性」が鮮明になることである。ユーリック流に言えば、歴史は情報闘争の歴史であり、カバラ的な思考つまり一個の身体=頭脳による思考と諜報

報的な思考つまり知をシステム化できるとみなし、知を組織しようとする思考との「階級闘争」である。

一個の身体=頭脳を自律したエンティティーとみなすかぎり、現象学的な意味での「地平」を認めなければならない。「人権」はこうした「地平」を前提するときのみその存在が保証される。諜報は、あらゆる「地平」を消去し、潜在的なものを顕在化して大脳の「ひだ」のすみずみまで侵入しようとするから、「人権」を無視せざるをえない。電子的な通信装置が「グローバル・ブレイン」と化した世界は、まさに諜報が到達しようとする世界だが、それは、徹底的に「人権」なき形而上学的世界である。近代科学は、諜報をあらゆる領域に拡大深化させることを通じて発展してきた。それは、たえず「地平」を踏み越えて進まなければならぬ。他方、カバラや鍊金術は、逆に「地平」を増やすことのなかで生き延び、そしてそれによつて秘儀的・権威主義的にもなつた。

問題は、この両者の何れかを選択することのなかにはないのだろう。ユーリックが、難解な哲学エッセー『メタトロン』のなかで示されているような該博な知識と透徹した論理にもかかわらず、小説をライフワークとしているのは、小説というジャンルが、近代科学的な思考にも、またカバラ的な思考にも還元されることのない流動的な地平を数多くそなえているからであろう。

なお、映画『ウォリアーズ』の原作者としても知られるソル・ユーリックの日本滞在中の発言は、『京都大学新聞』(八七年九月一六日号)、『週刊読書人』(八七年一月三〇日号)、『グラフィケーション』(八七年一二月号)、『すばる』(八八年五月号)で読むことができる。

昭和二十三年七月十五日第三種郵便物
昭和六十三年九月五日発行(毎月一回)五日発行
認可

思想

1988 9

思想の言葉 佐伯 育 (1)

『インタビュー』

情報の資本主義と形而上学 ソル・ユーリック (4)

(聞き手) 粉川哲夫

社会的制御調整の政治経済学 平田清明 (17)

マッカーシズムとパーソンズ(下) 高城和義 (52)

——学問の自由をめぐって——

コンドルセからサン・シモンへ 田中秀隆 (77)

——古典実証主義的社会変動論の生成——

「甘え」理論再考 土居健郎 (99)

——竹友安彦氏の批判に答える——

ワインチとシュツ ジョン・オニール (119)

——批判的社会科学の規制的理念をめぐって——

【書評】

折原 浩『マックス・ウェーバー基礎研究序説』 (42)

笛倉秀夫『丸山真男論ノート』 (48)

No. 771

岩波書店